

ビカクシダの育て方

Platycterium

ウラボシ科 / Polypodiaceae (Platycterioideae亜科)

鹿の角のように豪快に広がる孢子葉と、株元をまるく包む貯水葉。まったく違う2枚の葉が織りなす唯一無二のフォルムが魅力の着生シダです。板付けで壁面に仕立てれば、インテリアの主役にもなります。

基本データ

🌱 成長期

夏型（種により通年で緩やかに生育）

🌡 耐寒温度

10℃以上が目安（種による差が非常に大きい・要確認）

☀ 日照

明るい間接光・レースカーテン越し（直射日光は避ける）

📅 播種適期

周年（室内の無菌培養が中心、生育期に近い春～夏が管理しやすい）

🕒 発芽日数

原糸体出現まで2～4週間、板付けできる幼株までは1～3年ほど

📍 主原産地

熱帯アフリカ起源、汎熱帯分布（アフリカ・マダガスカル、東南アジア～オーストラレーシア、南米に1種）

🌱 難易度

🌱 概要・魅力

ビカクシダ（コウモリラン）は、鹿の角のように豪快に広がる孢子葉と、株元をぴったりと包む丸い貯水葉という、まったく形の異なる2種類の葉を持つ着生シダです。板や流木に着生させて壁面や吊り鉢で楽しむ「板付け」スタイルの代表格として、インテリアグリーンとしても人気が高まっています。

分類上はウラボシ科（Polypodiaceae）のPlatycterioideae亜科に置かれる属で、姉妹属にあたるHovenkampia属とは、始新世から漸新世への移行期にあたる約3,500万年前に分かれたと推定されています。近年の分子系統解析では、Platycterium属は熱帯アフリカで誕生し（「Out of Africa」仮説）、そこからアフリカ・マダガスカル、東南アジア～オーストラレーシア、そして南米へと海を越えて分布を広げていったと考えられています。汎熱帯性の着生シダ属という珍しい分布パターンを持ち、現在はアフリカ・マダガスカルに6種、東南アジア～ニューギニア・オーストラリアに8～11種、南米に1種（P. andinum）ほど、数え方によって幅はあるものの15～18種ほどが知られています。

Platycteriumの最大の特徴が、貯水葉と孢子葉の二形性です。株元を包む貯水葉は、雨水や落ち葉、周囲から流れてくる有機物を受け止めて溜め込む役割を持ち、枯れて茶色くなったあと「容器」として機能し続けます。上部の貯水葉が外敵の侵入を防ぎ、下側はスポンジのように水分を蓄えるという役割分担も報告されています。一方、鹿角状に大きく広がる孢子葉は光合成と孢子による繁殖の両方を担い、先端が溝状にカーブして雨水をコロニーの中心へ導く働きも持っています。葉の表面を覆

う白い星状毛（トリコーム）は、紫外線の反射や蒸散の抑制、大気中の水分の捕集など複数の役割を兼ねていると考えられています。

樹上という水も養分も乏しく不安定な環境に適応するなかで、Platycteriumの多くの種はコロニー（群体）を形成するという興味深い生態を獲得しました。属の共通祖先はもともとコロニー性だった可能性が高いと推定されており、現生種のうち少なくとも11種がコロニーをつくり、そのうち8種では株どうして役割が分かれる「分業」まで見られます。コロニーの上側の株が主に孢子をつくる生殖役を、下側の株が水分・養分を集める非生殖役を担うといった、垂直的な分業構造も観察されています。P. madagascariense や P. ridleyi のように、貯水葉の内部にアリの営巣スペースを提供し、アリが持ち込む有機物から養分を得ていると考えられている種もあり、着生植物ならではの助け合いの生態がPlatycteriumの魅力の一つになっています。

Platycteriumの魅力をまとめると、次の通りです。

- **2種類の葉がつくる造形美** — 丸く包む貯水葉と、鹿角状にダイナミックに広がる孢子葉のコントラストが、ほかの観葉植物にはない存在感を生みます。
- **板付けというスタイルの自由さ** — コルク板やヘゴ板に着生させて壁面ディスプレイにできるため、鉢植えとはひと味違うインテリアの楽しみ方ができます。
- **種ごとに大きく異なる個性** — 丈夫で流通量も多いP. bifurcatumから、貯水葉が1mに迫る大型種P. superbum、閉じた球状の貯水葉が特徴的なP. ridleyiまで、姿形のバリエーションが豊富です。

- **群体で育つ生態のおもしろさ** — 一株ではなく複数の株が支え合って育つ生態は、日々の観察でも新しい発見があります。

入門種として特に人気なのが**P. bifurcatum**です。オーストラリア北東部・ニューギニアを中心に自生し、子株（パップ）を多数つくってコロニーを形成する丈夫な種で、栽培品種も豊富に流通しています。より大型で見応えのある**P. superbum**や、貯水葉が完全に閉じた球状に発達する**P. ridleyi**、**P. coronarium**など、上級者向けの希少種も愛好家の間で人気です。SEEDSTOCKでは、こうした個性豊かなPlatyceriumを孢子から育てる楽しみを提案しています。

Platyceriumは「種子」ではなく「孢子」で殖える植物です。播種にあたる作業は孢子まきとなり、発芽の仕組みも種子植物とは大きく異なります。詳しくは「発芽のさせ方」でご紹介します。

☀ 置き場所

Platyceriumは、森林の林床から林冠にかけての柔らかい光環境に自生する着生シダです。**明るい間接光・拡散光**を好み、**直射日光**に当て続けると葉を覆う星状毛が傷んだり、**葉焼け**を起こしたりすることがあります。

光の強さは種によって異なる

一口にPlatyceriumといっても、好む光量には種による幅があります。P. veitchiiやP. ridleyiのように比較的強い光を好む種、P. bifurcatumなど多くの種が当てはまる中程度の光を好むグループ、P. ellisiiやP. stemariaのように弱い光でもよく育つ種まで、性質はさまざまです。お手元の種がどのグループに近い意識して置き場所を選ぶと、失敗が少なくなります。

室内での管理

室内で育てる場合は、レースカーテン越しの窓辺など**明るい日陰**が基本です。**北向き・東向きの窓辺**は直射が入りにくく、Platyceriumの置き場所として扱いやすいでしょう。エアコンの風が直接当たる場所は乾燥や急激な温度変化の原因になるため避けてください。

屋外での管理（温暖な時期）

気温が安定して暖かい時期は、軒下や樹陰など**遮光された風通しのよい場所**で屋外管理も可能です。ただし霜が降りようになったら、寒さが本格化する前に室内へ取り込みましょう。

湿度の管理

Platyceriumは高い空中湿度を好み、目安として**湿度50%以上**を保つのが理想です。P. willinckiiのように、さらに湿度の高い60～80%を好む種もあります。冬季は暖房によって室内の湿度が下がりやすいため、加湿器や葉水を活用して40～60%程度を維持するよう心がけてください。

耐寒性は種によって大きく異なる

Platyceriumの耐寒性は種による差がとても大きいのが特徴です。丈夫なP. bifurcatumでも、一時的に5℃程度までは耐えるとされますが、安全に冬を越すには**10℃以上、できれば15℃以上**を保つのが無難です。P. willinckiiは最低10℃程度が目安とされ、東南アジアや南米原産のP. ridleyi、P. wallichiiなどはより寒さに弱く、15℃を下回ると枯れるリスクが高まるとされています。お手元の種がどの程度の寒さに耐えられるか、購入時に確認しておくで安心です。

P. madagascarienseのように、逆に高温に弱い種も報告されています。おおむね15～25℃が適温とされ、28℃を超える環境が続くと数日で急激に弱ることがあるとされるため、真夏の高温多湿な環境では風通しと遮光を特に意識しましょう（この耐暑性の数値は情報源が限られるため、目安としてご参考ください）。

○ 水やり

Platyceriumの水やりで大切なのは、「**何日に1回**」という**カレンダー通りの管理**をしないことです。板付けや鉢の水苔がどれくらい乾いているか、株全体の重さがどれくらい軽くなっているかを見て、そのつど判断するのが基本になります。

生育期（春～秋）の水やり

生育が旺盛になる春から秋は、水苔の表面が乾いたタイミングで水を与えます。触ってみて乾き具合を確認める、あるいは板付けごと持ち上げて軽くなったと感じたら水やりのサインです。

休眠期に近い冬の水やり

気温が下がる冬は生育が緩やかになるため、水苔の表面が乾いてから**2～3日ほど間隔をあけて**から水を与えるくらいが目安です。生育期と同じ感覚で水を与え続けると、低温と過湿が重なって根や貯水葉を傷める原因になります。

ソーキング（浸け水）という方法

板付けや鉢ごとバケツやシンクの水に浸し、水苔から気泡が出なくなるまでしっかり吸水させる「**ソーキング**」は、Platyceriumの水やりでよく使われる方法です。表面から軽くかけるだけの水やりよりも、株全体にムラなく水分を行き渡らせやすいメリットがあります。冬場は冷たい水道水をそのまま使わず、**20～30℃程度のぬるま湯**を用意すると株への負担が少なくなります。

葉水（ミスティング）の活用

霧吹きによる葉水は、葉の表面を覆う星状毛の層や貯水葉の保湿に役立ちます。特に空気が乾燥しやすい季節は、水やりに加えて葉水も取り入れると、Platyceriumらしい元気な葉姿を保ちやすくなります。

水苔が常に湿ったままの状態は、後述する根腐れの最大の原因になります。「乾いたらたっぷり」のメリハリを意識し、迷ったときは触って確かめる習慣をつけましょう。

🔧 用土・植替え

Platyceriumは着生植物のため、一般的な培養土のような通気性・排水性に乏しい用土は根腐れの原因になり向いていません。水はけと通気性のよい素材で株を支える栽培方法が基本です。

板付け

Platycerium栽培の代表的なスタイルが「板付け」です。水苔で根鉢を包み、コルク板やヘゴ板、流木などに釣り糸やタッカーで固定します。株が成長すると根や貯水葉が水苔を覆うように広がっていくため、定期的に新しい水苔を継ぎ足して株を支えてあげましょう。SEEDSTOCKでも、実生から育てた苗を板付けに仕立てて楽しむ栽培スタイルをおすすめしています。

鉢植え・苔玉

鉢植えや苔玉で育てる場合は、水苔単体、またはピートモス・パーライト・小粒の軽石をおおむね7〜8：1〜2：1程度で配合した用土がよく使われます（配合比は情報源により多少幅があります）。いずれの場合も、水はけと通気性を優先して選ぶのがポイントです。

植替えの時期と頻度

植替えの適期は、生育が旺盛になる5〜6月頃です。鉢植えの場合は2〜3年に1回を目安に植え替えましょう。植替えの前1週間ほどは水やりを控えめにしておくと、根や組織へのダメージを軽減できます。

🌱 発芽のさせ方

Platyceriumは種子ではなく孢子で殖えるシダ植物です。種子植物のような「発芽」ではなく、孢子が発芽して前葉体（配偶体）という小さな組織をつくり、そこで受精が起きたのちに、私たちがふだんにする「孢子体」としての幼植物が育ってくる、という多段階のプロセスをたどります。数か月〜数年単位の長い道のりですが、SEEDSTOCKでは孢子培養に挑戦したい方向けの孢子や実生苗を取り扱っています。じっくり向き合いながら、世代交代のドラマを観察してみてください。

孢子的採取時期

成熟した孢子葉の裏側にある孢子囊群（ソーラス）の色が、緑色から赤褐色（さび色）に変わったタイミングが採取の適期です。孢子囊群のついた葉裏を白い紙の上に下向きに置き、暖かく乾燥した場所に3〜5日ほど置いておくと、乾燥によって孢子囊が自然に裂け、孢子が紙の上に落下します。

孢子まきから孢子体誕生までの手順

1. **孢子的採取する**：上記の方法で採取した孢子は、湿気を避けて乾燥した清潔な紙などに保管します。
2. **器具・容器・用土を無菌にする**：孢子まきに使う器具・容器・用土はすべて煮沸消毒またはアルコール消毒しておきます。孢子培養はカビや雑菌との戦いでもあるため、この下準備が成功率を大きく左右します。
3. **無菌の培地を用意する**：微塵状にした水苔や、ピートモスとパーライトを混ぜたものなど、粒子の細かい無菌培地を用意します。
4. **孢子的をまく（覆土はしない）**：培地の表面に孢子的を薄くまきます。Platyceriumの孢子的は好光性のため、覆土はしません。
5. **密閉して高湿度を保つ**：容器にふたやラップをして、常に高い湿度を保ちます。明るい間接光の当たる場所に置き、直射日光は避けてください。
6. **原系体・前葉体の発育を待つ**：条件が良ければ、孢子的の吸水から2〜4週間ほどで緑色の原系体（プロトネマ）が現れます。学術研究の記録では、最速の条件下で孢子的の吸水から根状体の出現までおよそ9日、原系体形成までおよそ2週間、ハート形に成熟した前葉体（配偶体）の形成までおよそ25日というタイムラインが報告されています。ただし、これは実験室レベルの好条件での数字であり、家庭での栽培ではこれより長くなるのが一般的です。
7. **受精を待つ**：前葉体の表面には、卵をつくる造卵器と精子をつくる造精器が発達します。これらは同時にではなく、時間差をつけて発達することが知られています。前葉体の表面が常にしっかり湿っている状態を保つことが、受精を成功させるポイントです。
8. **孢子体（幼植物）が現れたら鉢上げする**：受精が成功すると、前葉体から小さな孢子体（次世代のシダ本体）が姿を現します。この段階まで来たら、水苔で根元を包み、腐植質を含む用土に植え付けます。液体培地のままではこの先の成長が進みにくいため、土に近い培地へ移すタイミングを見極めることが重要です。
9. **幼植物を育てる**：幼植物のうちは霧吹きでこまめに表面を湿らせ、強い直射光は避けて管理します。過密になった配偶体・幼植物は間引きしたり株分けしたりして新しい培地に再配置すると、競合が減りその後の生育がスムーズになります。

孢子まきから板付けできるサイズの幼株に育つまでは、種や環境によって差はありますが、おおむね1〜3年、大型の種ではさらに長い年数を要することもあります。焦らず気長に向き合うのが、Platyceriumの孢子培養を楽しむコツです。

🐛 病害虫・トラブル

着生植物として丈夫な性質を持つPlatyceriumですが、通気不良や過湿が続くと病害虫トラブルが起こりやすくなります。早めに気づいて対処しましょう。

害虫

- **カイガラムシ**：Platyseriumで最も多く見られる害虫です。白～茶色の小さな楕円形の虫が葉や茎に付着して樹液を吸い、放置すると黄化や萎凋、株の衰弱、最終的には枯死につながることもあります。通気性の悪い環境で発生しやすいため、風通しの改善が予防の基本です。駆除の際は、葉を覆う星状毛の層を傷めないよう、強くこすりすぎないように気をつけてください。
- **コナカイガラムシ・コバエ**：カイガラムシ以外にも、コナカイガラムシやコバエ（フンガスナット）の発生が報告されています。過湿の環境で発生しやすいため、水やりの間隔にも注意しましょう。

病気

炭疽病は、通気が悪く多湿な環境で発生しやすい真菌性の病気です。発病した部分は早めに取り除き、風通しを改善したうえで、必要に応じて薬剤散布を検討してください。

よくあるトラブル

- **根腐れ**：過湿や、通常の培養土のような通気性の乏しい用土の使用が主な原因です。水苔ベースの通気性のよい用土を使い、乾いてから水を与える管理を徹底することが予防につながります。
- **光量不足による生育停滞**：光が不足すると生育速度が著しく落ち、極端な日陰では生育がほぼ止まってしまいます。「置き場所」を参考に、種に合った明るさを確保しましょう。

貯水葉が茶色く枯れていくのは、必ずしも病気やトラブルのサインではありません。枯れた貯水葉は雨水や落ち葉を溜め込む役割を持続ける、Platyserium本来の正常な生理現象です。青々とした孢子葉が健康であれば、貯水葉の褐変を過度に心配する必要はありません。

栽培メモ



ビカクシダの種子を探す
QRを読み取る／seedstock.jp